

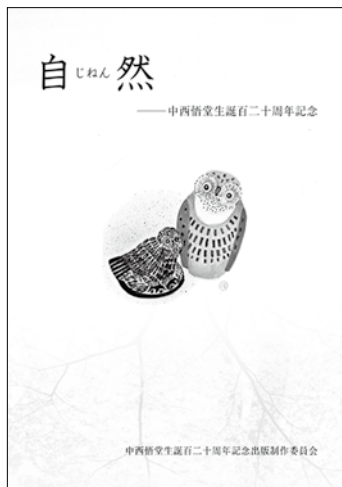
中西悟堂生誕百二十周年記念誌 『自然』刊行に寄せて

『自然』編集統括 内田康夫

日本野鳥の会は、故・中西悟堂師によって昭和9年（1934年）、日本初の自然保護を理念とする団体として創設されました。ここで「師」という語字を用いたのは、もともと天台宗の僧侶でおられたからです。

一昨年の平成27年（2015年）は、悟堂師の生誕120周年にあたり、それを記念して恩師ゆかりの生存者によって記念誌『自然』が刊行されました。西洋思想における‘nature’にはヒトは含まれず、ヒトに対立する存在と捉えられていますが、‘自然’という東洋思想ではヒトを含めた天地一切を意味し、対立ではなくすべてとの協調が根底となっています。また、悟堂師は歌人・詩人として秀れた業績を残され、多くの歌集・詩集を刊行されて、宮中歌会始めの召人も勤められました。

したがって、野鳥の会は、鳥類愛護だけにとどまらず、ここに述べた思想性や文芸を介しての感性・抒情性を育む総合的文化運動として発足したのです。その一方、悟堂師のお人柄というのは、悟りきった謹厳実直な堅物というイメージとは違って、破天荒なやんちゃ坊主という一面がありました。日頃、御自身でも「私は俗人、俗物だヨ」とおっしゃっておられました。



『自然』の編集にあたっては、こうした悟堂師の著作や恩顧を受けた方々の追悼文を載せ、また発表された3000首に及ぶ短歌の中から動植物への慈愛や抒情性に秀れた35首を厳選し、解説付きイラスト付きで紹介しました。そして、悟堂師が慈しみ護ってきた野鳥たち—その過去・現在についての頁を設けました。今、特に注記すべき種33種を選び、アート頁カラー版で解説してあります。図版は、日本で初めて科学的な鳥類図鑑の図を描いた故・小林重三画伯しげかずの原版を用いました。それに加えて、最近の鳥情報も添えました。

ところで、現在、日本野鳥の会の会員でありながら、中西悟堂という名前を全く知らない人も多いようです。これは、慶大生にして福沢諭吉を知らず、早大生にして大隈重信を知らないのと同断です。どのような団体であれ、その理念その歴史を知ることは大事なことと思います。
(うちだ・やすお)

※内田氏は、日本野鳥の会が法人化された当時の初代事務局長。『自然』は在庫が無くなっているとのこと。当会に寄贈されていますので、ご興味を持たれた方は、事務所開局日にお出かけください。